

# 国際体操競技会規定演技 の変遷とその考察

— あん馬 —

森 直 幹

研究論叢第7号に「国際体操競技大会における平行棒規定演技の変遷とその考察」を発表したが、今回はひきつづき「あん馬」規定演技をとりあげ、また器械寸度規格および規則をも含めてその変遷をたどってみたい。

国際体操競技連盟 (FIG) の規定演技は、周知のとおりオリンピック大会およびその中間に行なわれる世界選手権大会用として2年ごと★に作成される。したがって、規定演技はそれぞれ各時代の FIG 技術委員会の示してきた技術的な方向づけの姿勢や選手たちの一般的技術程度を我々に知らせてくれるものといえる。

体操競技の技術は、採点規則の充実・器械の改良と相まって近年急速な進歩を遂げているが、特に第1回国際競技会 (1903年) のあん馬規定演技 (文献 1, 25頁 図解参照) をみると、演技構成の要素が現在と大きなちがいを示している。木馬をつかつての跳躍運動 (文献 2, 10頁参照) から発展したと考えられるあん馬運動の歴史の一局面をみるようで非常に興味をもたれるが、当時の資料が思うように得られないのは残念である。

ここでは1928年第9回オリンピック大会以降を中心に資料をまとめ、規定演技の内容をふりかえてみることにした。

## 1. 器械と採点規則にみられるあん馬運動の変遷

### (1) 器械寸度規格の変遷

あん馬運動の発生は乗馬術からめばえたものであろうことは想像にかたくない。やがて馬の代用として、ぬいぐるみの馬や木馬 (文献 2, 10頁) が工夫され大いに利用されたものと思われる。近代ドイツ体育の父といわれるヤーン (1778年～1852年) の

〔注〕

★ 1972年ミュンヘン・オリンピック大会以降は、次の世界選手権大会と同一の規定演技を用いることになったため、1972年以降は4年ごとに作成される。

木馬（文献 3, 127頁図参照）にその経過をみることができる。この木馬による体育的な運動が組織化されてゆくに従い、木馬の頭・尾がけずりとられ、また鞍のかわりに把手がとりつけられる（1804年）（文献 2, 10頁）など、しだいに現在のあん馬の体裁をととのえてきたものと思われる。

1903年第1回世界選手権大会（アントワープ）で用いられたあん馬は、高さ120cm 長さ200cm（文献 1, 25頁）と現在のものより 40cm 長く、馬端へ移動しての技は存在していたとしても不便をきわめたことであろう。1928年のアムステルダム・オリンピック大会では馬の長さ 180cm（1903年のものより 20cm 短縮）、把手の高さ床から 120cm、把手は馬背から 12cm、幅 35cm、把手間の幅 39～42cm、把手の直径 30mm と、長さ以外はほぼ現在の規格に近いものであった（文献 4, 95頁）。この規格は、それから30年経た1958年の技術規程に示されたものと比べても、幅 36cm 把手の直径 34mm、把手の内部間隔 40～45cm（文献 5, 30頁）の点がわずかに変わっているだけである。

最も重大な改革は、次の1960年から適用された馬体長 160cm への短縮であった。この変更により、以後馬端部を利用してのさまざまな変化技や複合技が生みだされ、また、馬端部から他の馬端部への激しい移動技が工夫されるなど、技術面におよぼされた大きな影響を見逃すことはできない。すでに1948年ロンドンオリンピック大会において、アメリカチームが当時の規則より 20cm 短い馬を用いようとして、許されなかった（文献 6, 4頁）が、これが今日のあん馬の長さなのである。現在この 160cm のあん馬が、近代体操としてのあん馬のおもしろさを次々と生みだしているという現象はいかにも皮肉である。このようにして技術の進歩が器械の規格をかえ、器械の改良がさらに技術の向上に結びついて現在に至っている。

## （2）採点規則による演技構成要素の変遷

1936年第10回オリンピック大会当時は、まだ採点のための規則もきわめて大ざっぱなもので、一般に演技に対し、貧弱な演技に対し（2点）、不満足なもの（4点）、満足（6点）、良好（8点）、特に優秀（10点）の基準がもうけられ（文献 4, 37～38頁）、これにもとづいて各審判員の厳正な採点がなされていた。この時代には、器械ごとの演技内容に関する規則は特に明文化されたものが見あたらない。戦後は1950年に、国際ルールをもとにして国内で「審判法」が出されたが、ここではあん馬の演技に関する主な着眼点として、（1）よくバランスがとれていなければならぬ。（2）スイングが入らねばならぬ。（3）左右の各旋回が入らねばならぬ。（4）馬首部、鞍部、馬の臀部、

全体を使用して運動が為されねばならぬ。(文献 11, 22頁)と記されている。この(3)は逆旋回を、(4)はあん馬の三部分の使用を要求しているものである。1953年 FIG より細部にわたった規則が出された。その第2条にあん馬の構成要素として次のように要求している。「停止・静止を交えない転回運動。前方および後方での挟運動および円運動で、その少なくとも一つは2回連続とする。余分の中間振動はこれを避けるべきである。両側での連続運動とし、演技の一部、少なくとも両脚をもってする円運動2回は、主要部分では反対側でも行なわなければならない。両脚をもってする運動を主とし、かつ競技者は器械の三部分を用いなければならない。」(文献 5, 49頁)。尚、逆旋回「2回」の部分が1959年版採点規則では「1回」となっている(文献 8, 2頁)。

① 正・逆の交差を含み、そのいずれかは2回連続する。② 逆旋回を行なう。③ 器械の3部分を用いる。の条件のうち②の部分は1964年の改正により「規定演技の場合には逆旋回が考慮されなければならない。」と改まり、自由演技にはこれを用いる必要がなくなった。逆旋回に関しては、その歴史的背景として「左右均等からだを鍛える」といった体育的意味あいを含んでいたのではないかと思われる。すなわち右旋回をしたらその逆の左旋回もまわって左右の運動のバランスを保つべきであるというような考え方が根底にあったのではなかろうか。ここで、選手にとって不慣れた逆旋回の、自由演技における義務づけをはずしたことは、今日の高度化した体操競技としての観点にたてば、技の発展に対して大きな意味をもつものと考えられる。あん馬演技構成に関しては1964年に規則改正されたまま現在に至っている。

## 2. 規定演技の変遷

資料をもとに FIG の各大会の規定演技内容をまとめると、構成図および構成要素一覧表のごとくである。得られた中で最も古い資料の1903年第1回世界選手権大会規定演技を今日のものと比較すると、内容的に非常な違いをみることができる。すなわち、両足での余分な振り(振りもどし)で演技が始められ、中間に両足旋回と正交差が一つ、おり方は倒立からの開脚おりとごく短いもので、開始と終末はいずれも現行規則に適合しない内容である。このように規定演技が器械の大きさや採点規則の変遷を背景としながら、そのおもむきをかえてきているのであるが、どのような変わり方をして今日に至っているのであろうか。1928年以降を中心として規定演技変遷のあとをたどってみよう。

国際体操競技会規定演技の変遷とその考察

三部分の移動の構成要素一覧表

年 度	三部分の移動 (△印は馬端を 支えただけ)			○ は連続 交差		(一回未満切りすて) 両足旋回の頻度		主 要 部 分 の 技							
								横移動	上向き転向移動	馬端転向	下向き転向	下向き転向逆移動	片外手から転向逆移動	開脚下向き転向	
	馬端部	鞍部	馬端部	正	逆	正	逆								
1903	×		×	○	×	○	×								倒立 開脚おり。 両足での余分な運動
1928			△	○	×	○	×	トラムロー							逆旋回でトラムロー。 片足で余分な運動
1932			×	○	○	○	○		シュテクリ ○ ○	○ おり					
1936			×	○	○	○	○	○	○ ○ ○	○ おり					
1948			×	○	○	○	○	トラムロー シュテクリ							
1952				○	○	○	○		○					○	
1954				○	○	○	○	○	○ ○	○ おり				○	
1956				○	○	○	○		○	○ おり	○				
1958				○	○	○	○		○ ○			○ おり			
1960				○	○	○	○		シュテクリ 入り	○ おり					
1962				○	○	○	○		○ トラムロー		○ おり				
1964			△	○	○	○	○	○	○ ○ ○	○ おり			○ 入り	○	
1966				○	○	○	○		シュテクリ トラムロー		○ 入り おり				
1968				○	○	○	○		○ シュテクリ	○ 入り		○ おり		○	
1970				○	○	○	○		○ トラムロー	○ おり	○ 入り				
1972 1974			△	○	○	○	○		○ トラムロー		○	○ おり	○ 入り		

森 直 幹

1954・W	1956・O	1958・W	1960・O	1962・W	1964・O	1966・W	1968・O	1970・W	1972・O 1974・W
ローマ	メルボルン	モスクワ	ローマ	ブラハ	東京	ドルトムント	メキシコ	リュブリアナ	ミュンヘン バルナ
					片外手握り 				片外手握り 
		</							

## 国際体操競技会規定演技の変遷とその考察

	1903・W	1928・O	1932・O	1936・O	1948・O	1952・O
	アントワープ	アムステルダム	ロスアンゼルス	ベルリン	ロンドン	ヘルシンキ
開始の位置と開始の方向						
記号 説明 ○ 右(左)足右(左)入れ又は抜き ● 右(左)足左(右)入れ又は抜き ∨ 交差 ^ 逆交差 ^ 瞬間開脚前拳支持を経て逆交差しながら横移動 ○ 両足右旋回 C 両足右抜き(左入れ) ⊗ 両足左旋回 3/8 両足右入れ(左抜き) ◎ 馬端中向き旋回 W 横移動 K 上向き転向移動 R 下向き転向逆移動 T 下向き転向 GT 開脚下向き転向 GH 開脚とび転向 A 馬端転向 D 片外手握りから馬端部を押して横向きで転向逆移動 1/2 上向き1/2転向あり 1/4 上向き1/4転向あり F 下向き転向正移動						
終末の位置						
採点規則等に示された演技の構成要素(改正部分)						3部分の使用 逆旋回
器械の規格(改正部分)	馬体長 2.00 m	馬体長 1.80 m 把手間 39~42 cm	馬体長 1.80 m 把手間 40~42 cm			

## (1) 三部分の移動について

1903年では馬体の長さが2mであり、横への移動は全く考慮されていない点の特異である。1928年にはトラムローが組み入れられ、3部分を使用した構成が組まれた(馬体長180cm)。しかしながら、1932年、36年、48年には上向き転向移動の頻度がふえ、2部分間を3～4回移動しているにもかかわらず、いずれも2部分の使用にとどまっている。このことは「3部分使用」の構成上のとりきめが未だ存在しなかったことを裏づけるものであろう。1950年に出版された「審判法」に「3部分使用」の規則がみられるが、1952年以後はすべてあん馬の3部分が使用されている。1952年、56年は馬端部→鞍部→馬端部へと2回の移動による一方向の移動にとどまっているが、しだいに場所の移動回数がふえ、1960年に馬体の長さが160cmに変わったことも手伝って、1962年から1970年まではいずれも4回移動し、さらに1972年には6回の移動が組まれ変化にとんだ構成になっている。特に1972年の規定演技は、開始の部分で馬端から一気に他の馬端まで移動する近代的な高度な構成であることが注目される。

スピーディな多彩な移動を組む傾向は今後ますます引き継がれてゆくであろう。

## (2) 逆旋回について

1903年、1928年は左旋回のみで右旋回が入っていない。ただし1928年には右旋回の方<sup>・</sup>向<sup>・</sup>で<sup>・</sup>トラムローが組まれているので、むしろこの規定においては逆旋回という感覚ではなしに右・左の旋回が行なわれていたように思われる。逆旋回が規則上にみられるのは、得られた資料による範囲では1950年であるが、1932年以降は欠かさず逆方向の旋回が入れられている。1932年(3回連続)と1964年、1972年(2回連続)を除けば、あとはすべて2回未満の逆旋回である。ここで注目されるのは1964年と72年の逆旋回(2回連続)で、「逆旋回を規定演技に考慮しなければならない」という1964年の規則改正が影響しているものと思われる。

自由演技から逆旋回の要求をゆるめたことが技術の進歩に少しでもプラスになっているとするならば、規定演技における逆旋回をもはずし、さらに近代体操の技術の進歩を助成できないものであろうか。規定演技だけに要求されている逆旋回が、かえって選手たちの大きな負担になりはじめている現状のように思われる。

## (3) 正交差・逆交差について

1903年、1928年には正交差が入っているが交差連続でなく、また逆交差も含まれていない。現行規則に照らすときわめて内容に乏しいものであるが、演技構成上の片足

技に関するとりきめもまだなかったようだし、当時の技術程度を想像することができる。この交差に関する規則は1950年にはまだみられず、1958年版の採点規則にみることができるのであるが、規定演技には1932年以来ずっと正交差・逆交差および交差の連続が組み入れられている。このことから、この構成要素がその当時から選手間に広くとり入れられていたものであることが想像できる。交差技の合計数は1954年の5回を除けばいずれも3～4回で、1960年以降は正交差・逆交差ごとに連続してまとめて行なわれており、演技構成がすっきりしたかたちになってきている。さらに1964年以降にみられる特徴は、正交差と逆交差の間に逆旋回をはさんで、演技構成の二つの要求を1箇所にとまとめて中ほどに組んでいることである。この構成により後半の両足技による演技の主要部分が終末まで流れるように運ばれている点で一致している。

#### (4) その他の片足技について

前述の交差技を除いた「片足入れ、片足抜き」の片足振動技だけをとりだしてみると、表にみられるように1956年以来しだいに減少し、かつ逆足の入れ・抜き（たとえば、右足左入れなど）の頻度が少なくなっている傾向を示している。このことは両足旋回を中心とした演技構成に重点がおかれてきたことを示すものであろう。

逆足の入れ・抜きが減り片足抜きが簡素化されることによって、単にこまごまとしたややこしい片足抜きを器用に消化するというよりも、両足抜きによる流動的なよりスケールの大きな演技を演ずるという方向にかえられてきたことである。

とりもなおさず、その傾向は自由演技に対する指針としても大きなはたらきをもつものであり、美しさを強調させようとするものである。

#### (5) 移動技・転向技について

1928年にすでにトラムロー（横移動一上向き転向移動）が入っており、さらに1948年にはト

ラムローとシュテクリ（上向き転向移動連続）が入れられていることをみても、横移動と上向転向移動に関しては比較的長い間現在にいたるまで大いに使われてきている。

片足入れ・抜きの回数  
( ) 内はそのうち逆足の入れ・抜きの回数を示す。

1928年	6	(4)
1932年	12	(3)
1936年	8	(3)
1948年	4	(1)
1952年	3	(2)
1954年	7	(1)
1956年	8	(3)
1958年	6	(2)
1960年	6	(1)
1962年	6	(3)
1964年	5	(1)
1966年	4	(2)
1968年	5	(2)
1970年	4	(0)
1972年	4	(1)



1952年、1956年はこれらのうち上向き転向移動が一つあるだけ移動の変化が少なかったが、それぞれ開脚下向き転向と下向き転向、すなわちその場での転向技が初めて規定にとり入れられた年で、意義の高いものであった。馬端転向は1932年におり技として入っており、以後もたびたびおり技に使われているが、馬体が160cmに短縮された1960年と1968年には入り技として、また1972年には中間の技として使われるなど、今日規定演技の中で中心的な技の一つになっている。

おり技としては、その馬端転向おりに代わって1958年に初めて下向き転向逆移動おりが登場。その後も1962年、68年、72年としばしば用いられてきている。入り技としては、1962年まで主流をなしていた上向き転向移動に代わって、1964年以降は下向き転向あるいは片外手握りからの転向逆移動 (Drehflanke) が演技をひきしめている。

1952年より1960年まで、開脚浮腰支持からの逆交差横移動がよく取り入れられたが、その後は1972年までみられない。1962年以降は両足での転向技や移動技による高度な演技構成で演技の新しさを表現しようという方向に変わってきている点を見ることが出来る。就中1972年規定演技はスピーディな変化技を含み、近代的感覚をもり込んだ思いきった構成であるといえる。

### 3. まとめ

このように、規定演技を通してそれぞれの時代にどのような演技が行なわれていたのかを大づかみに知ることができる。近年の急速な技術の発展ぶりは目をみはるものがあるが、それは長い年月をかけて受け継がれてきた集積の結果であり、過去の規定演技を無視することはできない。その意味で、1903年第1回世界選手権大会の珍奇な規定演技を改めてかみしめてみなければなるまい。

これまで考察したように、技術の進歩は規則の改正や器械の改良との相互作用によってより高められてきたのであるが、規定演技内容から大きく次のように時代を画することができる。

- I. 1903年のころ：馬体長 200cm の馬を使用。場所の移動がなく鞍部だけで行なわれ、初歩的な振動技の他に力技が含まれていた時期。
- II. 1948年まで：馬体長 180cm の馬を使用。構成内容を示すはっきりした規則がなく3部分使用が成されない。上向き転向移動と交差技が中心的に組まれ、近代体操への基礎固めがされた時期。
- III. 1950年～58年まで：馬体長は同じく 180cm。あん馬の3部分使用が義務づけ

## 国際体操競技会規定演技の変遷とその考察

られ、混み入った片足振動技が重視されると同時に、あん部での下向き転向や下向き転向逆移動など高度な技がとり入れられはじめた時期。

Ⅳ. 1960年～70年まで：馬体長 160cm となり、馬端転向をはじめ下向き転向など両足技群の変化技が多く含まれ、また構成面で後半にもり上がりをつくったいわば充実期ともいえる時期。

最後に、1972年規定と今後のあん馬運動について触れておきたい。1972年の規定は、前半にスピーディな難しい移動技を組み、中間に交差技と逆旋回を組み合わせて動きのバランスをみようとし、後半は両足旋回をはさみながらトラムロー、下向き転向さらに下向き転向逆移動おりで演技の大きさと流れをみようとする近代的な構成の一面をよみとることができる。

さて、近年の自由演技の傾向をみると、中間旋回を極力なくし、めまぐるしい程の組み合わせ技や複合技で難度の高い演技が多く行なわれてきている。しかしながら難度ばかりを追うという傾向が過度になると、体操本来の動きの美しさが破壊され、コブだらけの怪物的な演技におちこんでゆくことも危惧される。規定演技においてはやはりスピーディな移動技と同時に、雄大な両足技をみせるような構成が残されてゆくべきではなかろうか。また、逆旋回については、前にも記したように規定演技からもその義務づけをはずし、演技に流動性をもたせてはどうかと思う。逆旋回に費やす努力が除かれれば、それだけ技術の発展に拍車をかけることになりそうである。

## あん馬規定演技資料

### 〔1〕1903年アントワープ世界選手権大会

両把手を握った正面横向き立ち：

とび上がり鞍部に正面支持、

両把手を握ったまま両足左入れ、

両足を振りもどして左抜きし左両足旋回1回（正面支持）、

右足右入れ、左交差、右足右入れして背面支持、

かかえこみ姿勢で両足を両手の間から抜いて、両把手上に倒立、

開脚おり（馬を背にして横向き半屈膝立ち）。

（文献 1：Entstehung und Geschichte der Weltmeisterschaften im Turnen）

解説図より作文

### 〔2〕1928年アムステルダム・オリンピック大会

姿勢、鞍馬の後部（向かって右が鞍馬の後部）へ側面向に直立し、左手で後部把手を握り、右手

を後部へ置く。

第一運動 後部を1/2回転しつつ、跳越し、右手で頭部把手を握り臂立姿勢となる。

第二運動 臂立姿勢の儘、両足で左へ、1・5 回転をなす。

第三運動 右足で1/2回転をなす。

第四運動 体の右方（頭部）にきた時、両足を交叉す。

第五運動 右足で右より馬背を旋回す。

第六運動 体が左方（後部）に到った時、両足を交叉す。

第七運動 右足で左より1/2旋回す。

第八運動 両足で左より旋回す。

第九運動 右足で左より1/2旋回す。

第十運動 振動を止め、右より其の儘、馬背を挟みつつ振込む（右足後方、左足前方）。

第十一運動 右足で左より1/2旋回す。

第十二運動 右手で後部把手を握り両足で1/2旋回し、鞍馬の後部へ背面臂立懸垂姿勢となる。

此時左手は足が1/2旋回せる後は後部へ置く。

第十三運動 両足で右より1/2旋回し、後部へ臂立姿勢となる。

第十四運動 両足で、後部末端を越えて、旋回し、把手の中間を越えて、右より1/2回転す。

第十五運動 両脚にて右より1/2旋回し、体を1/4回転させ、臂を側にしつつ、馬首を跳越して起立す。

（文献4より）

### 〔3〕1932年ロスアンゼルス・オリンピック大会

左手首右手左把手把持正面直立—1/2右回旋（背面）—右旋廻（背面）—1/2 右回旋（馬首背面）—右旋廻〔一回半〕（正面）—右脚右旋廻—1/2右回旋—左脚右旋廻—右脚右後振出—左方後交叉—右脚右後振出—左脚左前振出—右方前交叉—左方前交叉—右脚左旋回〔一回半〕（背面）—左旋廻〔三回〕（背面）—左脚左後振出—右脚右後振出—右旋廻〔三回〕—1/2右回旋（背面）—1/2右旋廻（右手ヲ左手ニ揃へ）（正面）—右回旋跳越下一臂側拳半屈膝直立

（文献4より）

### 〔4〕1936年ベルリン・オリンピック大会

Seitstand vorlings mit Griff der Hände auf den Pauschen, Spreizen des rechten Beines unter der linken Hand, Schere nach rechts, Spreizen des linken Beines unter der linken Hand, Flankenschwung rechts mit Wandern nach rechts, In den Stütz rücklings über dem Kreuz (linke Hand stützt auf der Hinterpausche, rechte Hand auf dem Kreuz), Kreisen des rechten Beines unter der linken und rechten Hand, Kehrschwung links mit 1/2 Drehung links in den Stütz rücklings über dem Sattel, Zurückflanken unter der linken Hand in den stütz vorlings über den Pauschen, Spreizen rechts vnter der rechten Hand, Schere nach links, Spreizen links unter der rechten Hand, Kreisen beider Beine unter der linken, rechten und linken Hand, Spreizen rechts unter der rechten Hand, Schere nach links, Schere nach rechts, Spreizen links unter der linken Hand, Kreisen beider Beine unter der rechten, linken, rechten, linken, rechten, linken und rechten Hand mit

Kehrschwung links mit 1/2 Drehung links in den Seitstütz rücklings über dem Kreuz. (linke Hand stützt mit Ellgriff auf der Hinterpausche, rechte Hand auf dem Kreuz. Flankenschwung unter der linken Hand mit 1/4 Drehung links zum Querstütz beider Hände auf dem Kreuz, eine weitere 1/4 Drehung links mit Flanke rechts in den Seitstand rücklings, halbtiefes Kniebeugen mit Seitheben der Arme, Kniestrecken und Senken der Arme in die Grungstellung.

(Die Übung kann auch gegengleich ausgeführt werden, aber nur in ihrer Gesamtheit, nicht in einzelnen Teilen.)

#### [5] 1948年ロンドン・オリンピック大会

両手両把を握り——両脚右旋回——左移行しつつ右手で左把手を握る——両脚右旋回——右リヤボルト——左脚右1/2旋回（左脚を右脚の下を通す）——左前交叉——右脚左1/2旋回——両脚左旋回——左脚左2/1旋回——右後交叉——左後交叉——右脚右2/1旋回——両脚右旋回——右リヤボルト（右手把手・左手馬尾）——両脚右旋回——右リヤボルト降り（サイドより把手の中央に入り把手を押して着地する腕は側上挙する）

（文献11より）

#### [6] 1952年ヘルシンキ・オリンピック大会

Aus Seitstand vorlings, rechte Hand auf der linken Pausche, linke Hand auf dem linken Pferdende. —— Flanke links, Kreisen rechts beider Beine mit zweimal viertel Drehung rechts und Griffwechsel der rechten Hand auf das linke Pferdende, Flanke links und Griffwechsel links auf die linke Pausche, Spreizen links, Einwenden, Vorschwingen links zum Seitschwebestütz über die linke Pausche. —— Spreizen rechts auswärts zur Wanderschere links Seitwärts, Schere rechts seitwärts, Spreizen links auswärts, Kreisen rechts beider Beine 1 1/2, Spreizen rechts, einwenden zur Schere rechts seitwärts. —— Vorschwingen links mit viertel Drehung rechts und Übergreifen rechts kammgriffs auf die rechte Pausche, Spreizen rechts auswärts mit viertel Drehung rechts zur Flanke links und Übergreifen links auf die linke Pausche. —— Kreisen rechts beider Beine 1 1/2 Kreisen links beider Beine mit halber Drehung rechts, Flanke rechts (Rückwärts) mit halber Drehung rechts und Stütz der linken Hand auf dem rechten Pferdende zum Seitstand links.

（文献12より）

#### [7] 1954年ローマ世界選手権大会

左馬端前に正面横向き立ち、左手は左馬端部、右手は左把手におく：

左へとび上がり右腕軸に上向き転向移動、両脚右抜き、左へ横移動（馬端部に背面支持）、

右足右抜き、左逆交差、右足右抜きして右腕軸に上向き転向移動（鞍部に背面支持）、

両足右抜き、左足左入れ、右交差、左交差、

右足右入れ、左旋回1回半（正面支持）、

右足右入れ、握りをもったまま左足左入れ、

右足右抜きしながら右手を左把手に逆手握りで移し、右へ1/4転向、さらに右足を抜きながら右

へ1/4転向、両足左入れ（開脚下向き転向）、

右足右抜き、左逆交差、右逆交差、

右足左入れ、右両足旋回1回、

両脚右抜きして左へ横移動（馬端部に背面支持）

直ちに馬端転向下向きおり、馬を右にしてたて向き立ち。

（文献13解説図より作文）

#### 〔8〕1956年メルボルン・オリンピック大会

（首を左、臀を右）

1. 臀の前で器械に平行正面の姿勢から、左手を右鞍に、右手を臀の上に置き、跳び上がり両脚を左手の下を通して臀立支持、左脚を右手の下、左鞍の上を通過、
2. 右手を右鞍に移しながら右脚を臀の上を通過させ、左手を左鞍に移しながら両脚を左鞍の上で交差、
3. 左脚を右手の下を通過させ、両脚を左手の下、右手の下を通過させる、
4. 左脚を左手の下を通過、右手の下で両脚交差、
5. 右脚を左手の下を通過、両脚を右手の下、左手の下、右手の下、左手の下を通過、
6. 両脚を右鞍の上を通過、右手を逆手に左鞍に移し右へ四分の一回転、右腕で支持して左手を右鞍に移しながら、両脚を首と右鞍の上を通過させて右へ四分の一回転（チェコ）、
7. 右脚を右手の下を通過、左脚を左手の下を通過、右脚を右手の下を通過、両脚を左手、右手の下で交差、
8. 左脚を左手の下を通過、両脚を右手の下を通過。
9. 右腕で支持して左手を首の上に移しながら、両脚を右鞍、次で首の上を通過させ右へ半回転、両脚を右手、左手の下を通過、
10. 左腕で支持して右手を首の上に移しながら、両脚を左鞍の上を通過させて右へ四分の一回転、右腕で支持して両脚を左鞍の上を通過させて右へ四分の一回転、次で右へ四分の一回転して首の方に前方へ跳び下り、馬に右側面して着地、

注意。全部に限り逆に行なってよい。

（文献14より）

#### 〔9〕1958年モスコー世界選手権大会

首の前で馬に平行し、これに正面し、右手を左鞍、左手を首に置いた姿勢から、

1. 跳び上って支持、右腕周に右へ半回転して両脚を首及び右鞍上を通し、左手を右鞍に（背面支持）
2. 左脚を右手の下及び臀部の上を通し、右手を右鞍に移しながら、右脚を右手の下を通し、左手を臀部に移しながら両脚を左で交差（左で後挟み）
3. 右脚を右手の下を通し、右腕周に右へ半回転、両脚を臀部及び左鞍の上を通し、左手で左鞍を再び握り背面支持。
4. 両脚を右手の下、左手の下を通す。
5. 左脚を右手の下を通し、左手の下で両脚を交差。（左で前挟み）
6. 右脚を右手の下を通し、両脚を左手及び右手の下を通す。

国際体操競技会規定演技の変遷とその考察

7. 左脚を左手の下を通し、両脚を右手及び左手の下で交差、(又後挟み2回)
  8. 右脚を右手の下を通し、両脚を左、右、左、右、左手の下を通す、
  9. 左手で支持し、右へ半回転、両脚を右鞍及び首の上を通し、右手を首の上に移す、
  10. 右腕の支持により、側方に(体を伸ばし)出るように両脚を左鞍の上を通し、背面向で着地。
- 注意 演技は停止しないで行なう。全部逆に行なってよい(全演技間左鞍と呼ぶのは首の方の鞍である。)
- (文献15より)

[10] 1960年ローマ・オリンピック大会

De la station latérale faciale devant le cou, main gauche sur le cou, main droite sur l'arçon gauche:

- I sauter en passant les jambes sous main gauche et, en appui sur bras gauche, passer les jambes par-dessus l'arçon gauche en tournant par 1/4 de tour à droite et en déplaçant main droite sur le cou et, en appui sur bras droit, tourner 1/4 de tour à droite en passant les jambes par-dessus l'arçon gauche et en déplaçant main gauche sur l'arçon gauche (appui dorsal),
- II passer jambe gauche sous main droite et par-dessus l'arçon droit à l'appui latéral à cheval derrière main gauche, passer jambe droite par-dessus le cou en déplaçant main droite sous l'arçon gauche, croiser les jambes par-dessus l'arçon droit en déplaçant main gauche sur l'arçon droit, croiser les jambes sous main droite (2 ciseaux en arrière),
- III passer jambe gauche sous main gauche, passer les jambes sous main droite et sous main gauche,
- IV passer jambe droite sous main droite avec 1/2 tour à gauche en déplaçant les prises alternativement ou simultanément (main gauche sur l'arçon gauche, main droite sur l'arçon droit), passer jambe droite sous main droite à l'appui dorsal,
- V passer les jambes sous main gauche, passer jambe droite sous main droite et croiser les jambes sous main gauche et sous main droite (2 ciseaux en avant),
- VI passer jambe gauche sous main gauche, passer les jambes sous main droite, gauche, droite, et,
- VII en appui sur bras droit passer les jambes par-dessus l'arçon gauche et la croupe avec 1/2 tour à droite en déplaçant main gauche sur la croupe (appui dorsal),
- VIII passer les jambes, sous main droite et, en appui sur bras droit passer les jambes par-dessus la croupe et l'arçon gauche avec 1/2 tour à droite en déplaçant main gauche sur l'arçon gauche à l'appui dorsal (Stöckli) et,
- IX en appui sur bras gauche passer les jambes par-dessus l'arçon droit et le cou avec 1/4 de tour à droite en déplaçant main droite sur l'arçon gauche (prises palmaires) et, en appui sur bras droit, passer les jambes par-dessus l'arçon droit pour sauter dorsalement à droite en reprenant prise gauche sur arçon droit à la station transversale costale gauche (1/2 tchèque).

REMARQUE L'exercice peut être inversé totalement.

(文献16より)

〔11〕 1962年ブラハ世界選手権大会

De la station latérale faciale devant le cou, main gauche sur le cou et main droite sur l'arçon gauche:

1. En appui sur bras droit, passer les jambes par-dessus le cou et l'arçon droit avec 1/2 tour à droite en déplaçant main gauche sur l'arçon droit à l'appui dorsal (entrée par couronnement à droite), passer les jambes sous main droite à l'appui facial,
2. passer jambe droite sous main gauche et croiser les jambes sous main droite, passer jambe gauche sous main gauche à l'appui facial,
3. passer les jambes sous mains droite et gauche, passer jambe gauche sous main droite et jambe droite sous main gauche, passer les jambes sous main droite à l'appui facial,
4. passer les jambes sous main gauche et, en appui sur bras gauche passer les jambes par-dessus l'arçon gauche en déplaçant main droite sur l'arçon droit et,
5. en appui sur bras droit, passer les jambes par-dessus la croupe en déplaçant main gauche sur la croupe, passer les jambes sous main droite et, en appui sur bras droit, passer les jambes par-dessus la croupe et l'arçon gauche avec 1/2 tour à droite en déplaçant main gauche sur l'arçon gauche, passer les jambes sous main droite à l'appui facial,
6. passer jambe gauche sous main gauche, croiser les jambes sous mains droite, gauche et droite, passer jambe gauche sous main gauche,
7. passer les jambes sous mains droite, gauche, droite et gauche à l'appui dorsal et, en appui sur bras gauche, passer les jambes par-dessus l'arçon droit avec 1/4 de tour à droite en déplaçant main droite sur l'arçon gauche, prise palmaire et,
8. en appui sur bras droit passer les jambes par-dessus le cou et l'arçon droit avec 1/4 de tour à droite en déplaçant main gauche sur l'arçon droit,
9. passer les jambes sous main droite (celle-ci reprenant l'arçon) et, en appui sur bras gauche, passer les jambes par-dessus la croupe et l'arçon gauche avec 1/2 tour à droite en déplaçant main droite sur la croupe pour sortir costalement à gauche à la station latérale dorsale.

Remarque: L'exercice peut être inversé totalement.

(文献17より)

〔12〕 1964年東京オリンピック大会

1. Seitstand vorlings, linke Hand auf dem linken Pferdende, rechte Hand auf der linken Pausche mit Ellgriff: Flanke nach rechts mit 1/2 Drehung links zum Stütz vorlings auf beiden Pauschen, Kreisen rechts beider Beine
2. Kreisen rechts beider Beine mit 1/2 Drehung links zum Stütz rücklings rechte Han-

- d auf dem rechten Pferdende und linke Hand auf der rechten Pausche
3. kreisen links beider Beine 1 1/2 mal zweimal 1/4 Drehung links zum Stütz rücklings, rechte Hand auf der rechten Pausche und linke Hand auf dem rechten Pferdende
  4. Spreizen rechts einwärts und Vorschwingen rechts mit 1/4 Drehung links und Stützwechsel links auf die rechte Pausche Kammgriff mit gegrätschten Beinen
  5. spreizen links auswärts mit 1/4 Drehung links und Stützwechsel die rechte Hand auf das rechten Pferdende, Kreisen rechts beider Beine mit 1/2 Drehung links zum Stütz rücklings auf beiden Pauschen
  6. Flanke, links Spreizen rechts auswärts zu Schere links und rechts seitwärts, Spreizen links auswärts und Kreisen beider Beine zweimal nach rechts
  7. Spreizen rechts auswärts zu Schere links und rechts seitwärts, Spreizen links auswärts
  8. Kreisen rechts beider Beine 1 1/2 mal
  9. Wanderkreisen links beider Beine zum Stütz rücklings, linke Hand auf der linken Pausche und rechte Hand auf dem linken Pferdende
  10. Flanke links mit 1/4 Drehung links und Kehre nach links mit 1/2 Drehung rechts zum Querstand links
- (文献18より)

[13] 1966年ドルトムント世界選手権大会

Seitstand vorlings, Hände an den Pauschen:

- I. Sprung in den Stütz mit Wendeschwung nach links um den linken Arm über den flüchtigen Stütz (Querstütz) mit Kammgriff auf der linken Pausche und Weiterschwingen nach links um den rechten Arm mit 1/4 Drehung rechts und Stützwechsel links auf die rechte Pausche in den Stütz rücklings,
- II. Flankenschwung rechts rückwärts (Stütz vorlings), Kreiskehrschwung um den rechten Arm und Stützwechsel links auf das linke Pferdende (Stütz rücklings auf dem linken Pferdende), Flankenschwung rechts rückwärts (Stütz vorlings) und Kreiskehrschwung um den rechten Arm mit Stützwechsel links auf die rechte Pausche in den Stütz rücklings (Stöckli),
- III. Kreisen beider Beine unter der rechten, linken und rechten Hand (Stütz vorlings), Spreizen rechts unter der linken Hand, Schererechts und links seitwärts (rückwärts),
- IV. Spreizen links unter der rechten Hand (Stütz rcklings), Kreisen beider Beine unter der linken, rechten und linken Hand (Stütz vorlings),
- V. Spreizen rechts unter der rechten Hand zur Schere links und rechts seitwärts (vorwärts), Spreizen links unter der linken Hand in den Stütz rücklings,
- VI. Kreisen beider Beine unter der rechten und linken Hand (Stütz rücklings) und Flankenschwung rechts rückwärts zum Wanderkreisen beider Beine nach links in den Stütz vorlings auf dem rechten Pferdende und Kreiskehrschwung um den rechten Arm und Stützwechsel links auf die linke Pausche in den stütz rücklings auf dem Pauschen (Tramlot),



VII. Kreisen beider Beine unter der rechten und linken Hand und über die rechte Pausche zum Wendeschwung nach links um den linken Arm über den flüchtigen Querstütz mit Kammgriff auf der linken Pausche und Wendeschwung nach links um den rechten Arm mit 1/4 Drehung rechts zum Niedersprung in den Querstand rechts.

Anmerkung: Die Übung kann nur insgesamt wiedergleich geturnt werden.

(文献19より)

[14] 1968年メキシコ・オリンピック大会

Seitstand vorlings, linke Hand auf dem linken Pferdende, rechte Hand auf der linken Pausche:

1. Kreisen beider Beine unter der linken und rechten Hand, Schwabenflanke nach links in den Stütz rücklings auf dem linken Pferdende, linke Hand auf der linken Pausche, rechte Hand auf dem linken Pferdende,
2. Spreizen links unter der rechten Hand und Vorschwingen links zum Seitschwebestütz über der linken Pausche, Spreizen rechts rückwärts mit 1/4 Drehung rechts und Griffwechsel der rechten Hand auf die linke Pausche, Kammgriff und
3. Wendeschwung nach links um den rechten Arm zum Stütz rücklings auf dem linken Pferdende,
4. Flankenschwung rechts unter der rechten Hand und Kreisen links beider Beine mit 1/2 Drehung rechts um den rechten Arm zum Stütz rücklings auf beiden Pauschen,
5. Spreizen rechts unter der rechten Hand zur Schere links seitwärts, rückwärts, Spreizen links unter der rechten Hand,
6. Kreisen beider Beine unter linken, rechten und linken Hand in den Stütz vorlings,
7. Spreizen rechts unter der rechten Hand zur Schere links und rechts seitwärts, vorwärts,
8. Spreizen links unter der linken Hand, Kreisen beider Beine unter der rechten linken und rechten Hand zum Stütz vorlings,
9. Stöckli nach rechts um den Arm und rechten Kreisen beider Beine unter der rechten und linken Hand zum Stütz rücklings,
10. Wendeschwung rechts rückwärts zum Stöckli rechts rückwärts um den linken Arm und Wendeschwung nach links über die Pauschen mit Stütz rechts zum Niedersprung in den Querstand rechts.

Die Übung kann nur als Ganzes gegengleich ausgeführt werden.

(文献20より)

[15] 1970年リュブリアナ世界選手権大会

I. Seitstand vorlings neben der rechten Pausche, linke Hand an der rechten (Pausche, rechte Hand auf dem rechten) Pferdende:

Sprung mit Stütz links und Tschechenkehre rechts in den Stütz rücklings auf dem rechten Pferdende,

- II. Rückflanken rechts und Kreiskehre nach rechts in den Stütz rücklings auf beiden Pauschen,
- III. Rückflanken rechts und Spreizen links auswärts zur Schere rechts und links vorwärts, Spreizen rechts auswärts in den Stütz rücklings auf beiden Pauschen,
- IV. Kreisen links beider Beine und Spreizen links auswärts zur Schere rechts und links rückwärts, Spreizen rechts auswärts in den Stütz vorlings auf beiden Pauschen,
- V. Kreisen links beider Beine  $1\frac{1}{2}$  in den Stütz rücklings auf beiden Pauschen,
- VI. Wanderkreisen rechts beider Beine, Rückflanken rechts und Kreiskehre nach rechts in den Stütz rücklings auf beiden Pauschen (Tramlot),
- VII. Kreisen rechts beider Beine gefolgt von Tschechenkehre nach rechts in den Stütz rücklings auf beiden Pauschen,
- VIII. Rückflanken rechts und Kreiskehre nach rechts in den Stütz rücklings auf dem rechten Pferdende und
- IX. Rückflanken rechts mit  $\frac{1}{4}$  Drehung rechts und Stützwechsel rechts in den Querstütz vorlings auf dem rechten Pferdende, Kreisen links beider Beine im Querstütz vorlings zur Wende nach links und Niedersprung in den Querstand rechts (Schwabenwende).

N.B. Die Übung kann nur als Ganzes gegengleich ausgeführt werden.

(文献21より)

〔16〕1972年ミュンヘン・オリンピック大会および1974年バルナ世界選手権大会

Seitstand vorlings neben der rechten Pausche, linke Hand auf der rechten Pausche, Ellgriff, rechte Hand auf dem rechten Pferdende:

- I. Flanke nach links mit  $\frac{1}{2}$  Drehung rechts um den linken Arm in den Stütz vorlings auf beiden Pauschen, Kreiskehre um den rechten Arm in den Stütz rücklings auf den linken Pferdende,
- II. Flanke rechts rückwärts und Schwabenflanke links um den linken und rechten Arm in den Stütz rücklings auf dem linken Pferdende,
- III. Spreizen links einwärts und Vorschwingen links in den flüchtigen Seitschwebestütz über der linken Pausche und
- IV. Spreizen rechts auswärts mit Stützwechsel der rechten Hand auf die linke Pausche und wanderschere links rückwärts, Schere rechts rückwärts,
- V. Spreizen links auswärts in den Stütz vorlings auf beiden Pauschen und Kreisen nach rechts beider Beine 2 mal in den Stütz vorlings auf beiden Pauschen,
- VI. Spreizen rechts auswärts zur Schere links und rechts vorwärts,
- VII. Spreizen links auswärts in den Stütz rücklings auf beiden Pauschen und Kreisen nach rechts beider Beine in den Stütz rücklings auf beiden Pauschen,
- VIII. Kreisen nach rechts beider Beine mit Wandern nach links in den Stütz rücklings auf dem rechten Pferdende,
- IX. Flanke rechts rückwärts und Kreiskehre nach rechts um den rechten Arm in den

- Stütz rücklings auf beiden Pauschen (VIII. und IX.=Tramlot),
- X. Kreisen rechts beider Beine nach rechts in den Stütz rücklings auf beiden Pauschen und Tschehenkehre rechts um den linken und rechten Arm in den Stütz rücklings auf beiden Pauschen,
- XI. Kreisen rechts beider Beine nach rechts in den Stütz rücklings auf beiden Pauschen und Kreisen rechts beider Beine nach rechts mit 1/2 Drehung rechts um den linken Arm und Stützwechsel rechts auf das rechte Pferdende und Flanke links mit Stütz rechts zum Niedersprung vorwärts in den Seitstand rücklings neben der rechten Pausche (verkehrtes Stöckli).

Bemerkung: die Übung kann nur als Ganzes gegengleich ausgeführt werden.

(文献22より)

#### 参考文献

1. Olympische Turnkunst 1967. Nr. 3
2. 今村嘉雄; 体操競技上 (師範大学講座体育第9巻) 1939
3. 岸野雄三; 体育の文化史 1967
4. 高木武夫; 体操競技 1935
5. 日本体操協会諸規則 1958
6. A.Gander; Die Kürübungen und ihre Zukunftsperspektiven (Symposium für Männliche Trainer/1969)
7. 三宅芳夫; 体操競技審判法 1950
8. FIG技術委員会男子部; 1959年版採点規則
9. FIG; Wertungsvorschläfen 1968
10. 日本体操協会; 体操競技採点規則 1964
11. 日本体操協会; 昭和25年度体操競技第2次オリンピック予選大会プログラム 1950
12. Olympischer Sport/Band 6 Turnen 1952
13. 日本体操協会; 一般男子全日本用・1954ローマ体操世界選手権大会規定問題解説図 1954
14. 日本体操協会; 昭和30年度全日本一般男子規定問題
15. 日本体操協会; 昭和32年度全日本選手権大会兼1958年モスクワ世界選手権大会規定
16. JEUX DE LA XVII OLYMPIADE REGLEMENT DE GYMNASIQUE
17. FIG; CHAMPIONATS DE MONDE 1962 PRAGUE
18. ITB; Wertaufteilung für Seitpferd-pflichtübung 1964 in Tokio
19. ITB; DORTMUND 1966 PROGRAMM UND PFLICHTÜBUNGEN DER MÄNNER FÜR DIE WELTMEISTERSCHAFTEN IN KUNSTTURNEN
20. ITB; PFLICHTÜBUNGEN für die Olympischen Spiele 1968 in Mexico-City
21. ITB; PFLICHTÜBUNGEN DER MÄNNER für die Weltmeisterschaften 1970 in Ljubljana
22. ITB; PFLICHTÜBUNGEN DER MÄNNER FÜR DIE OLYMPISCHEN SPIELE 1972 IN MÜNCHEN UND DIE WELTMEISTERSCHAFTEN 1974 IN VARNA

(もり なおき 本学講師 体育学)